

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：25201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870641

研究課題名(和文) 遠距離介護の困難軽減のためのコミュニケーションに関する研究

研究課題名(英文) Study of communication for mitigation of long distance caregiving troubles

研究代表者

中川 敦(Nakagawa, Atsushi)

島根県立大学・総合政策学部・講師

研究者番号：30609904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：離れて暮らす家族とケアマネジャーの間の相互行為では、遠距離介護の意思決定に関する道徳的なジレンマが生じることがあった。こうした道徳的ジレンマに対処するために、主に以下の2つの方法が用いられていた。すなわち、協調するスタンスを示しつつも独立した知識の優位性の主張を行なう終助詞「よね」の使用、順番単位の内部の区切れを利用しての、順番の共同完了、である。こうした方法を通じて、参与者間での責任の分散が成し遂げられ、遠距離介護の道徳的なジレンマの対処が可能になっているのであった。

研究成果の概要(英文)：Sometimes, there are moral dilemmas in long distance caregiving which is between the interaction of the distant family and the care manager. In order to deal with these moral dilemmas, they mainly use the following method: (1) usage of the final particle “-yone” to claim independent epistemic primacy showing an affiliative stance. (2) co-completion of a turn through taking advantage of the division in a Turn Constructional Unit. Through these method the dispersion of responsibilities are accomplished and made possible to deal with the moral dilemma of long-distance caregiving.

研究分野：福祉社会学

キーワード：遠距離介護 会話分析

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 遠距離介護の問題化と研究の不在

近年、日本では、健康・生活上の不安が生じた高齢者のために、遠く離れて暮らす家族が頻繁な帰省を繰り返す遠距離介護の報告がなされている。しかしながら遠距離介護に関する社会学的研究は少ない。そこで筆者はこの現象について、これまで「遠距離介護とは何か」という what と、「なぜ遠距離介護が行われるのか」という why という2つの問いを立て、遠距離介護を行なう離れて暮らす家族へのインタビュー調査を中心とした社会学研究を進めてきた。

### (2) 遠距離介護とは何か

その結果、まず「遠距離介護とは何か」という what の問いに関しては、「介護」という言葉がイメージさせる身体介護以外の側面がその多くを占めることが明らかになった。具体的には、在宅介護サービスの導入、親子の同居をめぐる交渉、そして施設入所への移行といった、介護をめぐる意思決定、そのための高齢者や、彼らの支援に携わる福祉の専門職者とのコミュニケーションが遠距離介護の中心であった[中川 2008]。このような what についての答えは、同時に、「なぜ遠距離介護が行われるのか」という why の問いに対する答えにもつながるものであった。

### (3) なぜ遠距離介護が行われるのか

すなわち介護保険の導入は、「介護の社会化」という形で、身体介護を家族の外部へと部分的に移譲させた。その一方でそれは家族に、介護をめぐる高齢者と福祉の支援者を仲介するコミュニケーションを担う役割を課したのである。ここで家族にとって「介護」という概念は、身体介護に加えて、介護をめぐる高齢者や彼らの支援に携わる福祉の支援者との間で取り交わされるコミュニケーションを含む形へと拡張されたのである。こうした「介護」概念の拡張と、子供と離れて暮らす高齢者の増加という家族形態の変動、さらに情報技術や交通手段の進展が、遠距離介護が行われる要因だったのである[中川 2006; 2007; 2012]。

## 2. 研究の目的

こうした遠距離介護研究の到達点は、今後の遠距離介護研究の課題を指し示してもいい。これまでは遠距離介護という新しい介護形態を研究対象とするだけでも、一定の意義が存在した。しかし遠距離介護研究が一定程度成熟した現在[cf. Neal et al. 2008; 中川 2012]、研究には現実の遠距離介護に対する貢献が求められる。そこで本研究は、遠距離介護者、高齢者、専門職者のコミュニケーションの分析を通じて、遠距離介護の困難軽減につながる技法および支援の可能性を探究する。

## 3. 研究の方法

以上のような問題意識に立った時、エスノメソドロジー (Ethnomethodology) と呼ばれる社会学における方法論的な立場、さらにはエスノメソドロジーが生んだ具体的な研究プログラムとしての「会話分析」 (Conversation Analysis) が参考になる。

エスノメソドロジーは、ハロルド・ガーフィンケルが社会秩序に関する議論を批判的に検討する中で生まれた[Garfinkel 1967]。その要点の一つは、行為に関する社会学的な問いを、why から how へと転換したという点にある。こうしたエスノメソドロジーの立場を経験的な研究プログラムとし、現在に至るまで、大きな成果を挙げているのが会話分析である。会話分析は会話それ自体に関心があるのではなく、あくまでも会話という一つの社会現象について、その秩序を成り立たせている人びとの how を記述することにその目的がある。また会話分析のフィールドは日常会話を前提としつつも、日常会話にとどまらず、法廷、教育、医療、福祉の現場などのコミュニケーションの分析としても展開されており、それらは総称して「制度的場面の会話分析」[Drew & Heritage 1992]と呼ばれている。そこから得られた知見は、離れて暮らす家族や福祉の支援者たちが、その場面の中に再度投げ込まれた際に、自らがどのような方法で振る舞えるのかについて、想起するための手がかりを提供する。そうした手がかりは、今後の新たな実践の中で彼らが迫られる差し手を選択する際に、重要な参照点となり得ると考えられる。

調査手法としては、従来のような、インタビューあるいはアンケートなどの回顧的な調査ではなく、遠距離介護における高齢者や専門職者とのコミュニケーションを、申請者自身が直接観察し、その様子をビデオ撮影してデータ収集するという手法を採用する。これは当事者自身が言語化できないままに、しかし気づかないうちに遂行している、遠距離介護の困難軽減のための技法や支援の方途を発見するためである。

## 4. 研究成果

本研究遂行の結果、以下の点が明らかになった。離れて暮らす家族は福祉の支援者とのコミュニケーションを通じて、高齢者の介護に関する意思決定過程に参加しているのであり、それは特に提案をめぐるやりとりにおいて遂行されることが多く見られた。こうした成果は、遠距離介護の what をより深める知見である[中川 2015]。ただし、離れて暮らす家族がそうした形で、福祉の支援者による提案の可否を判断する強い主体であることも、福祉の支援者が遠距離介護者のために提案をわかりやすい形で言い直すなど、コミュニケーションの中で共同的に位置づけられた結果であった。

また高齢者の生活環境に密着していない

がために、離れて暮らす家族の知識の欠如の問題が生起しているコミュニケーションにおいては、離れて暮らす家族は知らなかった高齢者の行為を、トピックの転換を行う形で焦点化し、家族を気にかけるといったふるまいをしていることも明らかになった。一方、離れて暮らす家族が知らなかった高齢者の行為に対する支援の提案に関して、福祉の支援者と遠距離介護者の間で方向性は一致しながらも、判断の根拠となる、どちらが離れて暮らす家族のことをより良く知る人間かの位置づけ、すなわち家族に関する「知識の上下関係」において、競合が生じうることも確認された。

また、遠距離介護の how により特化して分析した結果、離れて暮らす家族の利益を追求することで、彼らが老親に対して経済的な負担を行えないことや、高齢者本人のために支援者が行なうアセスメントが、離れて暮らす家族の意向と大きく食い違い、家族の意向を配慮できないといった、遠距離介護にかかわる道徳的なジレンマが生じる場合があることが明らかになった[中川 2016]。こうしたジレンマに対処するためには、大きく以下の2つの方法が用いられていた。すなわち、協調するスタンスを示しつつも独立した知識の優位性の主張を行なう終助詞「よね」の使用、順番単位の内部の区切れを利用したの順番の共同完了、である。そしてそうした方法を通じて、参与者間での責任の分散が成し遂げられ、遠距離介護の意思決定に関する道徳的なジレンマの対処が可能になっているのである。

具体的な事例を挙げよう。静子は老人保健福祉施設に入所している離れて暮らす継父のもとに片道4時間をかけて、1ヶ月に1回程度の頻度で通っている。継父は、現在入所中の老人保健施設で問題行動を頻発させており、静子は継父を別の施設に移ることを求められている。このためにケアマネジャーの川上と静子が相談をしている場面で静子は、継父が受給している国民年金を超えて、自らの経済的負担が必要になる、小規模多機能型特別養護老人ホームの利用の困難について、次のように述べている。「それをあれしてまでっていうのは:(, (0.7)う::ん」。ここで静子はその前に述べられていた「生活」を「それ」と指示代名詞で受けている。同様に、その述部を「犠牲にして」などとは言わずに、「あれして」と指示代名詞を利用して婉曲的に表現している。そして、その全体の述部を述べずに、0.7秒の沈黙を置き、「う::ん」と述べるだけで、順番内部での区切れを生じさせているのである。これに対して川上は、静子による「それをあれしてまでっていうのは:,」という発話の統語的な続きとなる「。難しいですよ ね。」を産出する。こうした未完了の他者の発話の順番を「共同完了 (co-completion)」するという実践は、彼らが直面しているジレンマに対処するための

有効な方法である。というのも静子はそこで、遠距離介護の限界による、継父へのケア責任の回避という道徳的期待に反するジレンマに直面している。その際、そうした方法は、個人的利害に傾きのある発言を社会的に(複数の話者に)分散することで、静子に集中しているジレンマの解消を図るものだからである。さらに注目すべきは、川上による共同完了の末尾の、終助詞「よね」の使用である。川上はこの「よね」の使用によっても静子の選択に協調しながら、自らの知識からも、静子の判断の正当性が担保できることを主張しているのである。以上のように、ここでは、離れて暮らす子供が自らの利害を追求し、親のための経済的負担を回避するということで生じる、道徳的なジレンマに対して、支援者と家族の間での遠距離介護の意思決定の責任を分散させる方法によって、その対処がなされていたのである。

今後は、遠距離介護の意思決定に、高齢者本人が参加した場合、そこにどのようなジレンマが生じ、どう対処されているのか、という問いにも取り組む必要があるだろう。

#### 参考文献

- Drew, Paul & Heritage, John (eds.) 1992 *Talk at Work: Interaction in institutional settings*. Cambridge University Press.
- Garfrinkel, Harold 1967 *Studies in Ethnomethodology*. Prentice-Hall.
- 中川 敦 2006 「実の娘による『遠距離介護』経験ときょうだい関係 なぜ男きょうだいを持つ娘が通うのか」『家族研究年報』31:42-55.
- 中川 敦 2007 「実の娘による『遠距離介護』経験と《罪悪感》 男きょうだいの有無による老親介護責任配分の位相」三井さよ・鈴木智之編『ケアとサポートの社会学』法政大学出版会 pp.37-71.
- 中川 敦 2008 「『愛の労働』としての『遠距離介護』 母親が要介護状態にある老親夫婦への通いの事例から」『家族研究年報』33:75-87.
- 中川 敦 2012 「遠距離介護と同居問題 『なぜ?』はどのように語られるのか」三井さよ・鈴木智之編『ケアのリアリティ』法政大学出版局 pp.137-162.
- 中川 敦 2015 年 「遠距離介護者は何をしているのか 提案の判断と離れて暮らす家族の知識」『総合政策論叢』(29) 29-44.
- 中川 敦 2016 年 「遠距離介護の意思決定過程の会話分析 ジレンマへの対処の方法と責任の分散」『年報社会学論集』(29) 印刷中.
- Neal, Margaret B., Wagner, Donna L., Bonn, Kathleen J. B., & Niles-Yokum, Kelly, 2008 "Caring form a Distance: Contemporary Care Issues," Martin-Matthews, Anne & Phillips, Judith E. (eds.), *Aging and Caring at the Intersection of Work and Home*

Life: Blurring the Boundaries, Lawrence Erlbaum Associates pp.107-128.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

中川 敦 2015年「遠距離介護者は何をしているのか 提案の判断と離れて暮らす家族の知識」『総合政策論叢』(29) 29-44.(査読有)

[http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/32kiyou/10sogo/seisaku29.data/03\\_nakagawa.pdf](http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/32kiyou/10sogo/seisaku29.data/03_nakagawa.pdf)

中川 敦 2016年「遠距離介護の意思決定過程の会話分析 ジレンマへの対処の方法と責任の分散」『年報社会学論集』(29) 印刷中.(査読有)

〔学会発表〕(計2件)

中川敦 2013年「遠距離介護者が参加するケア会議における老親についての知識と『家族』」の達成」『日本家族社会学会第23回大会』静岡大学(静岡県, 静岡市)

中川敦 2015年「遠距離介護の意志決定過程に関する探索的な研究 会話分析からのアプローチ」『福祉社会学会第13回大会』名古屋大学(愛知県, 名古屋市)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

中川 敦 (NAKAGAWA ATSUSHI)

島根県立大学・総合政策学部・講師

研究者番号: 30609904

(2)研究分担者

( )

研究者番号:

(3)連携研究者

( )

研究者番号: